

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：23803

研究種目：国際共同研究加速基金（国際共同研究強化(A））

研究期間：2019～2023

課題番号：18KK0324

研究課題名（和文）レキシコンにおける語形成と借用の関係と両者をつなぐ一般的メカニズムの解明

研究課題名（英文）Investigating the relationship between word-formation and borrowing in the lexicon and general mechanisms connecting them

研究代表者

長野 明子（Nagano, Akiko）

静岡県立大学・国際関係学研究所・教授

研究者番号：90407883

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,000,000円

渡航期間： 8ヶ月

研究成果の概要（和文）：国内外の研究室と7つの共同研究を実施し、研究ネットワークの形成に注力した。研究プロジェクトのうち5つは、語彙的・文法的借用、形容詞派生、等位複合、多重具現、擬音語という、世界の言語に広く見られる語彙現象についてである。残る2つはそうした現象の分析に必要な言語理論についての研究で、特に「競合」の理論化に成功した点が特記に値する。全プロジェクトを通じて、語彙研究においてもI言語（ヒトの精神に宿る遺伝的能力としての言語）とE言語（話し言葉、書き言葉、手話といった形をとって現実世界に存在する言語）の区別を意識することで、多様な言語資料と研究手法を活用し、目に見えない構造に肉薄できるとがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

言語には音、語、文という基本単位があるが、音や文に比べ、語という単位の自律性は理論的には疑われることが多かった。本研究の学術的意義は、語も音や文と同様に自律的な単位であり、別の単位に還元することはできないことを示した点にある。レキシコンにはそれ固有の理論があることは今や明らかである。本課題のプロジェクトで研究したどの言語現象においても、話者は個々の語彙素についてまとまりをなす知識を有していること、そしてその情報を土台にして派生や複合の操作を使って新たな語彙素を作りだすことが確かめられた。海外で積極的に成果発表を行い、日本語やその方言についての理解を深めてもらうようにした。

研究成果の概要（英文）： I conducted seven joint research projects with different linguistic laboratories both within and outside Japan. In addition to contributing to the purely academic advancement, I aimed to establish a robust international research network for the areas of morphology and word-formation. Five of the projects focused on word-level phenomena that are widely attested in the world's languages. These included lexical/grammatical borrowing, adjectival derivation, coordinate compounding, multiple exponence, and onomatopoeias. In the remaining two projects, my collaborators and I investigated the theoretical foundations of these phenomena and succeeded in theorizing "competition" in word-formation. The results demonstrate that the clear distinction between I-language and E-language (Chomsky 1986) is an invaluable methodological tool for extracting reliable data from available linguistic resources to reveal hitherto hidden aspects of morphological competence.

研究分野：言語学

キーワード：言語理論 レキシコン 派生形態論 複合 借用 競合

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の基課題のテーマは、生成文法理論における語形成の理論化についてである。そこでは語彙素基盤の形態理論 (Word-Based Morphology) (Aronoff 1976, Beard 1995) における借用の意味合いについても検討した (長野 2018)。その成果を踏まえ、「言語接触」まで射程にいった I 言語 (I-language, Chomsky 1986) 内レキシコンの一般的メカニズムを探る研究を計画した。言語接触とは、異なる言語同士が互いに影響を及ぼしあう一連の現象をいい、なかでも、借用はその代表的な現象である。これまで借用は歴史言語学および言語類型論 (Thomason & Kaufman 1988, Haspelmath & Tadmor 2009) のトピックとされてきたが、これらの領域は長い時間幅を取ったマクロな視点を採用するため、借用についても I 言語におけるメカニズムという観点で研究されたことはなかった。しかし外国語の語を別の言語の母語話者が自家薬籠中のものにする、つまり母語の言語知識の一部に取り入れることは事実として広く観察されているので、それが起こる過程は I 言語に属し、生成文法理論の説明対象となると考え、研究を開始した。

## 2. 研究の目的

- (1) 歴史言語学、言語類型論、および、それらを参照する近年の言語 / 文化進化論において、語彙は語族の同定や言語接触の有無・程度の検証に用いられてきた。これらの領域は言語についてマクロな視点をとるため、語彙についても、あたかも個々の単語がそれ自体として存在するかのような理想化、すなわち言語知識の物象化を行わざるをえない。本研究は、言語はヒトのこころの表示であるとする生成文法理論の考え方に立ち、語彙について人間の言語能力という観点からミクロな視点で考察し、その動的側面をレキシコンのプロセスとしてモデル化することを目指す。
- (2) 科学研究費補助金「国際共同研究強化」種目は、国際的に活躍できる、独立した PI (principal investigator) の養成を目的のひとつとしている。この目的に叶うよう、国内外の研究室と積極的に共同研究を行い、レキシコンのモデル化に関わる諸問題に広く対応できるような研究室体制を作ることを目指す。

## 3. 研究の方法

- (1) 仮説駆動型の研究方法をとる。理論言語学の研究成果を精査し、語形成や借用のメカニズムに関する具体的な課題を設定し、必要な言語資料を探索する。資料から課題におうじた側面を選択的に集め、それらを分析しつつ論理的議論を展開して設定した課題に答えを出す。
- (2) 言語資料は2つの方法で探索する。1つ目は信頼性の高い、書き言葉として集積されている自然産出資料(文書、辞書、コーパス)である。2つ目は実験的手法で人為的に産出させた、研究課題に即応したデータである。
- (3) 本課題において、言語資料の分析に用いる理論は極めて重要である。生成文法理論は統語論を主たる対象とするため、形態論・語形成については議論が続いている。そうした議論を点検・評価し、今後どのような方向に進んでいくべきかについて広い視点から検討を行った上で具体的な応用を行う。

## 4. 研究成果

- (1) 総論  
本研究では目的に沿って研究課題を設定し、国内外の研究室と共同してその課題に取り組み、それぞれに一定の答えを出すことができた。単独研究ではなく共同研究として取り組むことにより、基課題よりもはるかに広範で充実した言語資料と方法論的道具立てを試みることができた。以下ではプロジェクト別に研究成果と国内外でのその位置づけを述べるが、いずれも I 言語のレキシコンのメカニズムに関わるものである。大多数の研究課題のように E 言語 (E-language, Chomsky 1986) に同じ形をとって現れる特定の構文ないし現象を最大公約数的テーマとして設定しているわけではないので、一見するとばらばらなことに取り組んでいるかのように見えるかもしれない。しかし、生成文法研究の歴史を辿れば、そのような印象は正しくないことがわかるだろう。生成文法理論において各種の統語的構文が解体され、統語プロセスが中心研究課題になったように、本研究課題も多様なレキシコン現象から語形成プロセスを取り出すことに取り組んでいるのである。生成統語論はこの手法で格理論、theta 理論、束縛理論、併合とラベル付けといった理論を導いた。本研究の場合、一連のプロジェクトを通じて、第 1 に、レキシコンに

は、屈折形態論、派生形態論、複合、転換等に共通するメカニズムとして、語とそれを構成する素性、併合、音声具現に関わる諸原理（生産性、競合、アナロジー）の理論があることがわかった。第2に、併合は確かに文・語・音を貫通する普遍的な構造的な操作と考えられるが、文形成と語形成では違いもあることが見えてきた。統語論では語を併合し句を形成する。つまり、併合によって小さい単位から大きい単位を作るわけだが、語形成とは既存の語から新たな語を作るものなので、併合の前後で単位の大きさは変わらない。それでは形態論では何を原子要素とし、それをどう併合するのか。これに関するまだ見ぬ理論があるはずである。

## (2) 形態理論の展開に関する研究

西山國雄氏（茨城大学）と共同研究を行い、共著書『形態論とレキシコン』（開拓社、東京、2020年）を刊行した。語構造の研究は古代から行われている。その理論化について言語学史的に流れを辿ると同時に、チョムスキーによる研究転回後の、1言語における語構造の理論化について概観した。語構造には形式的側面と意味的側面があり、両者の対応付け（マッピング）は語彙素と拘束的形態論（派生形態論、屈折形態論）では異なることが見てとれた。また、形態論研究の伝統的重要テーマである動詞由来派生名詞の言語資料を用い、近年の代表的研究を精査し、そこから、連辞的に見た語構造の理論（これは、Lexical Phonology や分散形態論のような代表例がある）だけでなく、系列的に見た語構造の理論が必要であることを示した。

## (3) 派生形態論における競合現象に関する研究

本科研費種目の仕組みを用いて米国のオハイオ州立大学言語学科に滞在し、同学科の Andrea Sims 氏と共同研究 "Acceptability Judgment on Competing Word-Formation Processes" を実施した。研究実施計画に記した電子的コーパスから言語データを収集するだけでなく、オハイオ州立大学言語学科の Linguistics Outside the Classroom (LOC) の体制に参加し、実験によるデータ収集も行った。これらのデータを語彙素基盤の形態理論の枠組みで分析し、理論言語学分野の国際誌で査読付き単著論文 "Affixal rivalry and its purely semantic resolution among English derived adjectives" (Nagano 2023) として発表した。

## (4) 競合の理論化に向けた研究

二人目の海外共同研究者であるフランス・リヨン大学の Vincent Renner 氏と "Competition in Word-Formation" と題する共同研究を、ブルガリア・ソフィア大学の Alexandra Bagasheva 氏も交えて実施した。形態論分野の国際学会でワークショップを開催し、その成果を論文集 Competition in Word-Formation としてまとめた。この論文集は John Benjamins 社の理論言語学シリーズとして名高い Linguistik Aktuell の No.294 として刊行された (Competition in Word-Formation, ed. by Alexandra Bagasheva, Akiko Nagano, and Vincent Renner, John Benjamins, Amsterdam, 2024)。この研究を通して、ヨーロッパの語形成研究ネットワークに入るだけでなく、今後の協同関係を確実なものにすることができた。

## (5) 多重具現現象に関する研究

筑波大学英語学研究室の廣瀬幸生氏、島田雅晴氏、和田尚明氏と共同研究を行い、共編著『比較・対照言語研究の新たな展開 三層モデルによる広がりや深まり』（開拓社、東京、2022年）を刊行した。三層モデルは言語使用の機能には他者との情報共有、独り言・思考、対人配慮の3つがあると前提し、このうちのどれを重要視するか（どれを言語使用のデフォルトレベルとするか）によって言語間差異を説明できるとする。これまで日英語の対照比較に用いられ、両言語間に見られるいくつかの文法的な違いを説明できることがわかっている。本プロジェクトにおいて、語構造における多重具現 (Harris 2017) に関して日英語の対照比較を行い、多重具現の形式的なパターンには言語間で本質的に差が見られないこと、いっぽう、言語間で違いが出るのは、どのような意味素性を多重に具現するかであることを示した。これは先行研究にはない新しい知見であり、三層モデルの基盤になっている日英比較の手法が効果的に働いた例である。

## (6) 等位複合に関する研究

米倉緯氏（京都府立大学）、島田雅晴氏（筑波大学）と共同研究を行い、共著書『英語と日本語における等位複合語』（開拓社、東京、2023年）を刊行した。等位複合語は、従属複合語、修飾複合語と並んで、複合を文法的に分類した場合の3大タイプの1つである。英語と日本語を中心に、しかしそれ以外の様々な言語からも資料をとりながら、等位複合語の歴史、類型、形態構造、語彙意味論のそれぞれを詳細に検証した。また、併合とラベル付けという操作が語にも働くとして、等位複合語はどのように作り出されているのかを厳密に検証した。この種の複合についてこれほど網羅的かつ詳細に論じているモノグラフは国内のみならず国外にもない。今後、第2版を英語で刊行するとよりインパクトが大きくなるはずである。

## (7) 擬音語（オノマトペ）に関する研究

スロバキアの P.J. Safarik University, Department of British and American Studies が実施する世界の擬音語に関する国際共同研究に参加し、*Onomatopoeia in the World's Languages* (ed. by Livia Kórtvélyessy and Pavol Štekauer, De Gruyter Mouton, Berlin, 2024) の刊行に携わった。日本語

の擬音語の分析を担当した。語彙素の音と意味の関係はソシユールのいうように恣意的であるのが通常だが、擬音語は例外的にその音が意味、すなわち現実世界で知覚される音やその発生を体現する。この特殊性から、擬音語の音韻論・形態論・意味論・統語論的特性について仮説が得られる。本プロジェクトでは、それらの仮説を Eurasia, Africa, Papunesia, Australia, North America, South America という「世界言語構造アトラス」(WALS)の6大言語地域すべてにわたる91の言語をサンプルとして検証し、仮説の妥当性について一定の答えを出した。国際共同研究の規模においても、対象となる言語資料の新規性・学術的重要性においても、非常にインパクトの大きい研究であるといえる。

#### (8) 語源と語彙借用に関する研究

大林武氏、山田和範氏(ともに東北大学)と共同研究を行い、共著論文「言語間語彙比較に基づく野生動物の生息域推定の試み」(大林・山田・長野 2019)を発表した。大林氏は進化生物学、山田氏は情報工学の専門家である。大林氏を研究代表として、世界各地に単語として存在する生物名の類似度から、その生物種の起源と拡散過程についてどこまで正しく推論できるかという問題に取り組んだ。各種野生生物に対応する Wikipedia の見出し語と言語間リンクに基づき、言語間の語彙の類似度を算出したところ、各種野生動物の生息域の広さ、その動物を示す語彙の多様性、ならびに単語長が関連していることを見出した。

#### <引用文献>

本文中に書誌情報を示した文献や本報告書の5節に掲載する文献は除く。

Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: The MIT Press.

Beard, Robert. 1995. *Lexeme-Morpheme Base Morphology: A General Theory of Inflection and Word Formation*. Albany, NY: SUNY Press.

Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*. New York: Praeger.

Harris, Alice C. 2017. *Multiple Exponence*, Oxford University Press, Oxford.

Haspelmath, Martin and Uri Tadmor (eds.). 2009. *Loanwords in the World's Languages: A Comparative Handbook*, De Gruyter Mouton, Berlin.

Thomason, Sarah Grey and Terrence Kaufman. 1988. *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*, University of California Press, Berkeley.

長野明子. 2018. 「第III部 最新のレキシコンと形態論の進展」『言語研究と言語学の進展シリーズ第1巻 言語の構造と分析 統語論, 音声学・音韻論, 形態論』, 西原哲雄(編), 170-257, 開拓社, 東京.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 NAGANO AKIKO	4. 巻 59
2. 論文標題 Affixal rivalry and its purely semantic resolution among English derived adjectives	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Journal of Linguistics	6. 最初と最後の頁 499 ~ 530
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1017/S0022226722000147	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Nagano Akiko	4. 巻 1
2. 論文標題 43 Japanese	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Onomatopoeia in the World's Languages: A Comparative Handbook, Berlin, Boston: De Gruyter Mouton	6. 最初と最後の頁 513 ~ 526
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/9783111053226-043	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Nagano Akiko, Shimada Masaharu	4. 巻 9
2. 論文標題 NN and VV Coordinate Compounds	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Languages	6. 最初と最後の頁 143 ~ 143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/languages9040143	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Nagano Akiko, Bagasheva Alexandra, Renner Vincent	4. 巻 1
2. 論文標題 Chapter1. Towards a competition-based word-formation theory	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Competition in Word-Formation, Edited by Alexandra Bagasheva, Akiko Nagano and Vincent Renner [Linguistik Aktuell/Linguistics Today 284]	6. 最初と最後の頁 1 ~ 31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/la.284.01nag	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Nagano Akiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Chapter2. A lexicalist approach to affixal rivalry and its explanatory basis	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Competition in Word-Formation, Edited by Alexandra Bagasheva, Akiko Nagano and Vincent Renner [Linguistik Aktuell/Linguistics Today 284]	6. 最初と最後の頁 34 ~ 71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/la.284.02nag	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Shimada Masaharu, Nagano Akiko	4. 巻 1
2. 論文標題 Chapter11. Ambiguities in Japanese pseudo-coordination and its dialectal variation	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Pseudo-Coordination and Multiple Agreement Constructions	6. 最初と最後の頁 246 ~ 270
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1075/la.274.11shi	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長野明子、島田雅晴	4. 巻 1
2. 論文標題 「多重具現の言語間比較の試み」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『比較・対照言語研究の新たな展開 三層モデルによる広がりや深まり』廣瀬幸生、島田雅晴、和田尚明、長野明子 (編)	6. 最初と最後の頁 277-314
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Nagano	4. 巻 4
2. 論文標題 Word-formation in theoretical linguistics	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Data Science in Collaboration	6. 最初と最後の頁 8-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takeshi Obayashi, Kazunori Yamada, and Akiko Nagano	4. 巻 4
2. 論文標題 Cross-linguistic similarity of the names of an animal species reflects its habitat.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Data Science in Collaboration	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akiko Nagano	4. 巻 37
2. 論文標題 "Rethinking Morphology by Laurie Bauer, Edinburgh University Press, 2019."	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 English Linguistics	6. 最初と最後の頁 224-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大林武、山田和範、長野明子	4. 巻 2019-CH-121
2. 論文標題 言語間語彙比較に基づく野生動物の生息域推定の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究報告人文科学とコンピュータ (CH)	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 14件)

1. 発表者名 Akiko Nagano and Masaharu Shimada
2. 発表標題 "Co-synonymic dvandva compounding: Its historical change and cross-linguistic variation"
3. 学会等名 the 13th International Conference on Historical Lexicography and Lexicology (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 「Dvandva 型等位複合語の生産性についての第 3 の仮説」
3. 学会等名 近代英語協会40周年記念大会 シンポジウム『英語史の事実から言語理論を検証する 通時的に妥当な理論の構築を目指して』
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 「英語の接尾辞-yによる様態動詞からの形容詞派生とその共時的・通時的・通言語的特徴」
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第75回大会 シンポジウム『様態と結果の相補性をめぐって』
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yuri Togano and Akiko Nagano
2. 発表標題 “ The prefixal rivalry between over- and out- in Modern English and its unique characteristics ”
3. 学会等名 the 21st International Morphology Meeting ( 国際学会 )
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Akiko Nagano and Yuri Togano
2. 発表標題 A grammaticalization analysis of the English differential eventive prefix "out-"
3. 学会等名 57th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea ( 国際学会 )
4. 発表年 2024年



1. 発表者名 Masaharu Shimada and Akiko Nagano
2. 発表標題 NN and VV coordinate compounds in the lexical semantic framework
3. 学会等名 57th Annual Meeting of the Societas Linguistica Europaea (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Akiko Nagano
2. 発表標題 The English verbal prefix "out-" and the relationship between its spatial and differential types
3. 学会等名 ELSJ (the English Linguistics Society of Japan), 17th International Spring Forum 2024 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Nagano, Akiko
2. 発表標題 "The English suffix -y and the French suffix -eux from a competition-based perspective"
3. 学会等名 Word-Formation Theory IV/ Typology and Universals in Word-Formation V (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada.
2. 発表標題 "Verum, focus, and Hichiku Japanese sentence-final particles"
3. 学会等名 the 55th annual meeting of the Societas Linguistica Europaea (SLE) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada
2. 発表標題 “ Analogical rule extension underlying novel requisitive imperatives in web Japanese ”
3. 学会等名 the 20th International Morphology Meeting ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada
2. 発表標題 Contrastive approach to dvandva compounding in language contact
3. 学会等名 the 15th ESSE conference (the European Society for the Study of English), ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nagano, Akiko
2. 発表標題 On property concept constructions in English derivational morphology
3. 学会等名 the 5th American International Morphology Meeting ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nagano, Akiko
2. 発表標題 “ To lord it: Accusative intransitive verb? ”
3. 学会等名 International Meeting on Conversion vs. Zero-Derivation ( 招待講演 ) ( 国際学会 )
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 「英語における名詞由来形容詞の派生について」
3. 学会等名 津田塾大学言語文化研究所「英語の通時的及び共時的研究の会」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 形態理論と語彙比較
3. 学会等名 Data Science in Collaboration, a workshop in Tsukuba Global Science Week (TGSW) 2020 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長野明子
2. 発表標題 legged とleggy のような2重語を作る生産的な形容詞派生接尾辞-y
3. 学会等名 形容詞が関わる語形成をめぐって (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Shimada, Masaharu and Akiko Nagano
2. 発表標題 Word-formation with loanwords: A case of Japanese English
3. 学会等名 International Symposium of Morphology 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Renner, Vincent and Akiko Nagano
2. 発表標題 An ecological approach to word-formation: Reflections from an English-Japanese contrastive perspective
3. 学会等名 Language and Ecology (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大林武, 山田和範, 長野明子.
2. 発表標題 「言語間語彙比較に基づく野生動物の生息域推定の試み」
3. 学会等名 情報処理学会第121回人文科学とコンピュータ研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 米倉綽・長野明子・島田雅晴	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 275
3. 書名 英語と日本語における等位複合語	

1. 著者名 Alexandra Bagasheva, Akiko Nagano, and Vincent Renner (eds.)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 John Benjamins Publishing Company	5. 総ページ数 352
3. 書名 Competition in Word-Formation	

1. 著者名 廣瀬 幸生、島田 雅晴、和田 尚明、長野 明子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 336
3. 書名 比較・対照言語研究の新たな展開	

1. 著者名 長野明子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 15
3. 書名 「語とは：形態論」杉崎鉦司・磯部美和・稲田俊一郎（編）『言語研究の世界：生成文法からのアプローチ』	

1. 著者名 Shimada, Masaharu and Akiko Nagano	4. 発行年 2022年
2. 出版社 John Benjamins Publishing Company	5. 総ページ数 26
3. 書名 "Ambiguities in Japanese pseudo-coordination and its dialectal variation" In G. Giusti, V. N. Di Caro, and D. Ross (eds.) Pseudo-Coordination and Multiple Agreement Constructions.	

1. 著者名 長野明子、島田雅晴	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 10
3. 書名 完了ではないテアルについて：島田・長野（2019）補遺（岡部玲子他（編）『言語研究の楽しさと楽しみ』）	

1. 著者名 西山國雄、長野明子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 241
3. 書名 『形態論とレキシコン』	

1. 著者名 Nagano, Akiko and Masaharu Shimada	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Harrassowitz Verlag	5. 総ページ数 24
3. 書名 "On the semantics of certain V+V sequences in Standard and Fukuoka Japanese," In: Ambiguous Verb Sequences in Transeurasian Languages and Beyond, ed. by Eva Csato et al.	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
シムズ アンドレア  (Sims Andrea)	オハイオ州立大学・Department of Linguistics・Professor	

6. 研究組織（つづき）

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
レナー ヴィンセント  (Renner Vincent)	リヨン大学・CeRLA・Professor	

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
パガシュヴァ アレクサンドラ  (Bagasheva Alexandra)	ソフィア大学・Department of English and American Studies, ・Professor	
島田 雅晴  (Shimada Masaharu)	筑波大学・人文社会系・教授	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計3件

国際研究集会 Linguistics and Data Science in Collaboration 7言語データとその「鏡」 機械学習モデルを用いた言い誤りと失語症例の分析	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 International workshop on Language Change: Internal and External Factors (temp.), DaSiC2022 (Linguistics and Data Science in Collaboration)	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 “Towards a competition-based word-formation theory,” Workshop at Word-Formation Theories VI & Typology and Universals in Word-Formation V Conference	開催年 2022年～2022年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	The Ohio State University		
フランス	University of Lyon		

共同研究相手国	相手方研究機関			
スロバキア	P.J. Safarik University			
ブルガリア	Sofia University			